

## 上野天神祭：福居町

赤い緋羅紗の「しるし」は、福居町の住人であった松尾芭蕉（1644-1694）の書であると言われている。オリジナルの幕は保存のために保管されている。1990年に新しい「だんじり」が製作され、「三明幟山」あるいは「三明祭幕」という名前が付けられた。

福居町の「だんじり」は三明と呼ばれ、江戸時代の日本を照らした輝く日、月、星の三つを表している。「だんじり」のそれぞれの波風には、金色の太陽、銀色の月、輝く星が描かれている。天幕には雲龍が、前幕、後幕、胴幕には森の中の虎が刺繍されている。水引幕には日本的な詩歌の環である連歌を構成する歌人の画像が刺繍されている。「三十六歌仙図」で、三十六首の和歌が描かれている。

「三明だんじり」の欄縁鋳金具は、正確な毛彫り打ち出しの彫刻で注目に値する。四隅のそれぞれに、中国の伝説の方角を表す青龍、朱雀、白虎、玄武を表す飾金具が取り付けられている。

「三明だんじり」に同行するお囃子は、小さい鉦の摺り鉦、締太鼓、太鼓、竹製の竜笛などの楽器を演奏する。「だんじり」の参観者は、日本民話に登場する笑顔の人物「お多福さん」の名前の一文字「福」が染め抜かれた法被を着る。福の字は福居町の「福」でもあり、幸運を意味している。